

田植え機に乗って、作業の様子を見学するフィリピン人
スタッフ＝沼田「空知こめ工房」の水田で＝



フィリピンの農業技術、生産性の向上を目指し――

現地スタッフが北空知で研修

日本のNPO法人の協力を得て、フィリピンで農業機械のレンタルや修理、メンテナンスなどの業務に従事する現地人スタッフが五月二十一日から十日間の日程で来日し、農業研修をした。同二十五日には、深川や沼田で、大型機械を使った田植えや、花き栽培の様子などを視察した。

東京都に本部を置くNPO法人「ジーエルエム・インスティテュート」(GLMI、西野桂子代表理事)は二〇一二年、日本国際協力財団や現地NGOと共同で、小規模稲作農家を対象とした事業を、フィリピンのヌエバ・ピンスカヤ州で開始。農業機械の低価格でのレンタルや、低利子ローンの提供、生産性向上のための研修の実施などを通して、稲作の過程を包括的にサポートしている。GLMIによると、フィリピンは世界有数の米消費国だが、周辺国と比較して生産性が低く、機械化も十分に進んでいないという。今回の研修は、スタッフが日本で農業や農業機械に関する技術知識を得ることで、農

業技術や生産性の向上につなげようと企画。クラウドファンディングで費用の出資を募ったところ、深川市文光町で農業機械のメンテナンスなどの業務を行う「アオイサービス」の高橋渡武代表がこれに協力したことから、北空知管内での研修をプログラムに組み入れた。

二十四日に深川入りした一行は翌日、市内の高橋代表の実家で花き栽培を見学。引き続き、沼田町へ移動し、農業生産法人「空知こめ工房」(木村寿文社長)が、同町更新に持つ水田を訪れた。

現地で事業を統括するアルザイン・ミナ・アグサルダさん(37)は「フィリピンでは手植えが主流。一畝の田んぼで約二十人が作業をしているので、日本の田植えの効率の良さに驚いた。今回の研修で得た知識を生かし、生産性や効率の向上につながる農機具のレンタル、サービスの提供に努めたい」と話した。

木村社長から、約二十七畝で「ゆめびりか」「ななつぼし」などの品種を栽培していることなどについて説明を受けた一行は、大型機械による田植え作業を興味津々の様子で眺めたほか、実際に田植え機に乗って水田を往復した。